

ルリ色のカラス

奄美市立朝日小学校 四年 なおか かすみ

「カアカアカア。」

わたしは、どこにでもいるまっ黒な羽根をもつあのカラス。名前はカラ。わたしたちカラスは、食べ物があれば、どこにでも行く。木の実や魚などはもちろん、死んだ生き物でも食べる。

でも、わたしは、食べることよりあま美のきらきらかがやくすてきな海を見ることのほうがずっとすきだ。

「なんてすてきな海なんだろう。」

晴れた日は、太陽の光をたくさんあびて、しずかにゆれる波の景色をカラは毎日毎日見ている。

ある日、カラは、いつものように食べ物を探しに出かけた。

ケロケロケロー。

カラは、はじめて聞こえてきたふしぎなき声が気になって、森のおくへおくへと進んでいった。そこは、緑がしげっているじめっとした森だった。まわりの岩場からは、すきとおったきらきら光る水がちよろちよろと流れていた。

「道にまよったのかい。おじょうさん。」

ふりむくと、体がきらきら光っているイシカワガエルがいた。

「おじさんの体は、どうしてそんなにきれいなあ。」

「ほっほっほっ。ありがとよ。」

「どうしたら、おじさんのように、きれいになれるの。」

「そりゃあ、わしにも分からんよ。もう、ずっとずっと昔からわしらは、こんなすがたなんじゃ。」

「わたしも、きれいになりたいな。」

「しかし、お前さんは、カラスなんじゃから無理じゃないかね。」

「でも、この島に住むカエルやヘビや花は、みんなきれいな色をもっているわ。どうして、わたしたちカラスだけがまっ黒なのかしら。」

それからというもの、カラは、ますます海や花の美しい色にひかれて、うっとりするようになった。おなががすくとまわりのカラスは、食べ物をさがしにいろいろな場所へ出かけていくのに、カラだけはちがった。カラは、ソテツの実などを少しかじっては、あとの時間は花や海などをながめていた。

ある日、仲間のカラスが言った。

「いつも、ここで何をしてるんだい。」

「海を見ているの。」

「それより、いい話があるぜ。」

「ここより北の方の土地には、二本足で歩く動物が住みはじめたらしい。ニンゲンというらしい。その生き物たちは、ずい分食べのこしのゴミを出すって話だぜ。もっと食べ物をつくさん手に入れられるかも。行こうぜ。」

けれど、カラは、こう言った。

「わたしは、いいわ。わたしは、このあま美の海や花がすきな。食べ物だったら、その辺の木の实や花で十分よ。気をつけてね。さようなら。」

カラの仲間たちは、しばらくすると、北の方へ飛び立って行った。

それから、カラは、ずっと一人で海をながめていた。何日も、何日も。

それから、何年たっただろう。

また、あのカラの仲間たちが帰って来た。仲間のカラスは、あのころのように、ずっと海をながめているカラのすがたを見つけた。そして、びっくりした。

「カラ。どうしたんだい、その体は。」

「えっ。」

「君の体の色のとき。」

「何のことか、さっぱり分からないわ。」

「君、あのカラだろう。どうして、そんな色の羽根なんだい。」

カラは、その時、初めて気がついた。自分の体の羽根の色が仲間のカラスの色とちがうということに。かたからおしりは、あま美の海にしずむ夕やけのようなオレンジ色をしており、頭から首、羽根としっぽにかけて、ふかい海のようなルリ色の羽根でかがやいていた。

「これがわたし——。」

「なんてきれいなんだ。」

仲間のカラスたちは、しばらくカラの体を見つめていた。カラのかがやく色に、仲間のカラスは、まっ黒な色は、ずかしくなった。そして、仲間のカラスは、また、北の方へもどっていった。

なぜ、カラは体の色が変わったのだろうか。それは、だれにも分からない。でも、カラはあま美の美しい色に、いつもいつもあこがれていた。カラは、もうまっ黒なカラスなんかではない。ルリ色のきれいな羽根を持つ鳥になった。

ルリ色のカラスは、今ではルリカケスとよばれ、あま美の人びとにあいされている。あなたもルリ色のカラに会えるかもしれない。